

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：エヴァンゲリオン 新劇場版 破

今回のテーマ

I. アスカの心について考えていく

II. シンジの心について考えていく

I. アスカの心について考えていく

新劇場版の破で初めて登場したが、プライドが高く、「あんたバカァ」という言葉が口癖で、感情的で自己顕示欲も強い。外見同様華やかであり、まさにエヴァ2号機の色である赤は彼女そのものを表していると言っても過言ではない。一方でシンジのことを常に気になるも素直にその思いを表出できず、綾波とシンジが親しくしていることに嫉妬したり、夜中に一睡もできず、自分が常に肌身離さずもっているパペットを用いて「私は特別」「1人でやるしかない

い」と自分に語りかけるように、自分の自信のなさや否認し、孤独感や寂しさを必死に紛らわし、なかったことのようにしている。

そのアンビバレントな様子が思春期の心性を非常に表しているように感じられる。

1. 思春期における青年期に至る過程（Adolescence Process）について

心身が成長し、大人のような体つきになり、二次性徴とともに色々な欲望が出てくる。今までの学童期に自身が調和が保たれていると感じ、慣れ親しんできた価値観がひっくり返され、社会的、家庭的秩序がある意味崩壊していくような感覚を抱き、自身のこれまでのアイデンティティ揺さぶっていく。

この過程における困難な情緒的体験要素：喪失、選択、独立、幻滅、混乱
etc

多くの人が出来る限り避けようと努める内的葛藤や不安が刺激される

彼らはこの体験を 崩壊の感覚と恐怖、並びに迫害感を感じ、回避しようと

し、考えないようにする

→色々な利那的に行動することで、なかったことのようにする。この心の動きを 思考を回避する心の動き (Anti-thinking process) という。

2. 思考を回避する心の動き (Anti-thinking process) とは？

- ①混沌の回避しようとして万能感を抱く (カリスマ、理想化)
- ②個人でいるよりグループで (SNS 依存、オンラインゲーム依存)
- ③知性化 (知性の回避)
- ④考える事より行動 (暴力・リストカット等)
- ⑤心をもつことの拒否 (ひきこもり、不登校)
- ⑥感情かき乱されるよりも身体的病気になること (身体化)
- ⑦限界ある現実よりも万能的空想的世界

(good and bad な世界 白黒はっきりさせる 極端な価値観)

アスカは上記では主に①にあてはまる。 シンジは⑤と考える。

3. アスカの心の変遷について考えていく

1) アスカに関して

式波・アスカ・ラングレー：EVA2号機のパイロット（“第2の少女”）で、ドイツ出身の帰国子女。EVAパイロットおよび補完計画の道具として造られたクローン人間、シキナミシリーズの1人（選別された生き残り）（アニメ版では両親がいた。）。多数のクローンとの生存競争に勝つため、EVAを誰よりも乗りこなすことだけを自らの存在価値とし、ユーロ空軍のエースに上り詰めた。

新劇場版 破では、綾波を「エコひいき」、シンジを「七光り」「バカシンジ」というように馬鹿にして、常に相手より優位に立とうとする。

→肛門期の固着とも捉えられる。

2) 葛城ミサトの家に引っ越してきたときのシーン

たくさんの荷物を持ってきて、部屋に所狭しと段ボールで埋め尽くされていることに、帰ってきた碇シンジが唖然とする。

アスカ「しかし、どーして、日本の部屋ってこう狭いのかしら。荷物の半分も入り切らなかったわ。おまけに、どうしてこう日本人って危機感足りないのかしら。よくこんな鍵のない部屋で暮らせるわね。信じらんない」

→荷物：自分の思い。開けられていない段ボールの荷物は情緒的葛藤を対処できず、未消化で残った澱み（ β 要素）がたくさんあるということを象徴しているように感じられる。

鍵のない部屋への警戒心：易々と自分の心に踏み込んでほしくないという象徴にも感じられる。

→一方でシンジの部屋に荷物を埋め尽くすところは、シンジに対して自身の未消化な澱みを受け止め、それでシンジを支配したいという願望のようにも感じられる。

ミサト「アスカとシンちゃんに足りないのは、適切なコミュニケーション。同じパイロット同士、同じ釜の飯を食って仲良くしないとね」

→情緒的葛藤を共有していくことで思考を回避する心の動き（Anti-thinking process）をやめて、主体的になり、成熟することの大切さを伝えている。

その後、シンジとアスカはぶつかりあったが、その晩、寝床でシンジもアスカも眠れず、アスカを持ってきたパペットに向かって呟いている。

アスカ「あいつらとは違う。私は特別。だから、これからも……一人でやるしかないのよ、アスカ」

→パペットはアスカにとっての移行対象。そのなかで上記のように言い聞かせ、奮いたたせることで生存競争にかつてきた。一方で、この場面ではアスカがシンジという異性を意識し、依存したい思いを必死に打ち消そうとしているように感じられる（cf エースをねらえ！の岡ひろみ）

その後も社会科見学と称して日本海洋生態系保存研究機構に一緒に行ったりしながら交流を重ねていく。

3）第8使徒との戦いのシーンの後

第8使徒との戦いに関して、シンジがいち早く使徒に近づき、アスカがコア部分を壊そうとするが、外してしまい、綾波が動き回るコア部分をしっかり押さえ、そこにアスカがトドメを刺して倒す。

その戦いの後、コクピットの中でアスカはこれまでの戦いを振り返り

「私一人じゃ……なにもできなかった……」と呟く。

→万能空想を抱いていた自分自身の限界に直面し、現実に向き合おうとしている

→肛門期の固着からエディプス葛藤に移行している

(妄想分裂ポジションから抑うつポジションへの移行でもある。)

その夜、アスカは眠れない夜を過ごし呟く。

アスカ「ずっと、一人が当たり前なのに……孤独って気にならないはずなのに」

そうやってシンジの部屋に入り込み、シンジに背を向けて布団の上に寝転ぶ。

アスカ「七光り……ちょっとだけ居させて」

シンジ「あの……式波……さん？」。

アスカ「今日、ドサクサに紛れて名前呼んだでしょ。特別にアスカでいいわよ。あたしもバカシンジって呼ぶから」

→名前で呼ばれること、心の距離が近づくことである。名前で呼ぶことを許す

ことはアスカがシンジに対して少し心を許し、距離を近づけたい思いが出てい

る。

シンジ「じゃあ、あの……アスカはどうしてエヴァに？」

アスカ「愚問ねえ……。黙ってなさいよ、バカシンジ。自分の為よ。エヴァに乗るのは。あんたはどうなのよ」

シンジ「よく……わかんない」

アスカ「……あんたバカ？そうやって責任逃れしてるだけなんでしょ？」

→キツイ言い方だが、アスカに心を開いて、自分の思いを言ってほしいと言っているように感じられる。

シンジ「父さんに褒めてほしいのかな？今日は、初めて褒めてくれたんだ。初めて褒められるのが嬉しいと思った。父さん、もう僕のこと認めてくれたのかな？ミサトさんの言ってた通りかもしれない」

→父に褒めてほしいには2つ意味がある

①ここにいていいんだ、という母性的受容：母に抱えられる乳児

②これでいいんだ、という社会的承認：エディプス葛藤を通じて社会の一人として受け入れられた承認

→これは、結局アスカの言った「自分のため」ということに他ならない

アスカ「あんたってホントにバカね」

【考察】

序でも

シンジ「綾波は、なぜエヴァに乗るの？」

綾波「絆だから」

という上記の会話がなされたが、シンジら彼らにとってエヴァに乗るということとは、自分が生きるか死ぬかのギリギリに直面することであり、「なぜエヴァに乗るの？」という問いは「自身の生きる意味」への問いであり、たわいもないやりとりのようにも感じるが、この会話を通じて深い交流をしているように感じられる。

→アスカがシンジの言動に対して意識し始める：エディプス葛藤

4) エヴァンゲリオン3号機が日本に送られたことで、バチカン条約に基づきア

スカの乗る 2 号機が封印されることになり、アスカは搭乗できないことが決まり、非常に落胆するシーン。

アスカ「そんな……私の世界で唯一の居場所なのに」

→アスカにとって自身の存在意義であり居場所であった 2 号機の喪失にショックを隠せない。

その後、アスカがエレベーターに乗ろうとすると既に綾波が乗っていた。長い沈黙が続いた後に綾波が口火を切る。

綾波「エヴァは自分の心の鏡」

アスカ「なんですって？」

綾波「エヴァに頼らなくていい。あなたには、エヴァに乗らない幸せがある」

アスカ「偉そうなこと言わないで！エコヒイキのクセに！私が天才だったから、自分の力でパイロットに選ばれたのよ！コネで乗ってるあんた達とは違うの！」

→今までエヴァと同一化し、そのエヴァを喪失したアスカにとって綾波の言葉は受け入れられず、怒りを感じたと考えられる。

綾波「私は繋がっているだけ。エヴァでしか、人と繋がれないだけ」

→アスカは「自分のために」エヴァに乗っていると考えてきた。彼女にとってこの言葉は綾波が主体性がないように感じられたように感じられ、怒りを感じたのではないだろうか。（「自分のために」というのは結局、人（社会）と繋がることであり、綾波の主張とアスカの思いは変わらない。）

アスカはレイの言葉を大声で反論する。

アスカ「うるさいっ！アンタ碇司令の言うことはなんでも聞く、おすまし人形だからひいきされてるだけでしょ！？」

→主体性がないから、自我がないから、いいように使われていると言っているように感じられる。

綾波「私は人形じゃない」

アスカ「人形よ！少しは自分を知らなさいよ！」

アスカは手を振り上げてレイを叩こうとする。しかし、レイは振り向いてその手を止める。レイが出した左手には沢山の絆創膏が巻かれていた。それを見たアスカは少し冷静になる。

アスカ「ふん……人形のクセに生意気ね」

→絆創膏が巻かれていた指をみて、自分と同じく、シンジに対して関心があり、エディプス葛藤のはざまにいることに気が付く。

目的の階に到着したアスカは、ズカズカと外に出て行こうとする。しかし、一瞬考えて足を止めると、綾波に聞く。

アスカ「ひとつだけ聞いわ。あのバカをどう思ってるの？」

綾波「バカ？」

アスカ「バカと言えばバカシンジでしょ」

綾波「碇君？」

アスカ「どうなの？」

綾波「よく、わからない」

アスカ「これだから日本人は、ハッキリしなさいよ！」

綾波「わからない。ただ、碇君と一緒にいると、ポカポカする。私も……碇君に、ポカポカして欲しい。碇司令と仲良くなって、ポカポカして欲しいと……思う」

アスカ「……分かった」

アスカ「ホンット、つくづくウルトラバカねっ！それって、好きってことじゃん！」

5) 綾波が提案した食事会の日に 3 号機機動実験が行われることになったが、その 3 号機にアスカが乗ることに決まり、アスカがそこに乗り込もうとするシーン。

アスカが車で移動中、携帯に留守電が入っていることに気が付く。

綾波からの伝言だが、なかなか離さず、長い沈黙にアスカはイライラ来るが、最後に「……ありがとう」という綾波の言葉に驚いた表情と同時に微笑み、清々しい表情をする。

→アスカが 3 号機に乗ることで食事会に行くことをやめたことに対して綾波が感謝したように感じられるその表情をしたように感じる。

アスカ「ふんっ！バッカじゃないの！私がエヴァに乗りたいたけなのに」

→綾波も自分と同じエディプス葛藤の中で色々苦悩していると感じ、清々しくなったと感じる。

その後アスカが 3 号機搭乗直前にアスカは守秘回線でミサトに連絡する。

ミサト「どうしたのアスカ？本番前に」

アスカ「何だかミサトと二人で話がしたくってさ」

ミサト「そう。今日のこと、改めてお礼を言うわ。ありがとう」

アスカ「礼はいいわ。愚民を助けるのがエリートの義務ってだけよ。元々みんな

で食事ってのは苦手だし、他人と合わせて楽しい振りをするのも疲れるし、

他人の幸せを見るのも嫌だったし、私はエヴァに乗れば良かったんだし、

元々一人が好きなんだし、馴れ合いの友達は要らなかったし、私をちゃんと見

てくれる人は初めからいないし、成績のトップスコアさえあれば NERV で一人

でも食べていけるしね」

ミサトは静かにアスカの声を聞いている。

アスカ「でも最近、他人と居ることもいいなって思ったこともあったんだ。私には似合わないけど」

ミサト「そんなことないわよ。アスカは優しいから」

アスカ「こんな話ミサトが初めて。何だか楽になったわ。誰かと話すって心地いいのね。知らなかった」

ミサト「この世界は、あなたの知らない面白いことで満ち満ちているわよ。楽しみなさい」

その後

アスカ「そっか……私、笑えるんだ」と呟く。

→ミサトをはじめとした大人達に抱えられる中で、シンジや綾波達と交流を重ね、被支配・支配の2者関係から思いやりの心を持ち（妄想分裂ポジションから抑うつポジションの移行）、思考を回避する心の動き（Anti-thinking process）から離脱し、心が成熟し、現実をイキイキと感じ始めようとしている。

しかしアスカがそう感じ始めたところで、何者かに侵食され、精神が侵され3号機が暴走し、第9使徒と化してしまう。

Ⅱ. シンジの心について考えていく

新劇場版 序において、綾波との関わりの中で今まで自分の自己愛的な膜に閉じこもっていたシンジ、綾波という対象（外界）に対して関心を持ち始め、膜を破り始めた。その後、最後のシーンで「自分に、自分には他に何もないって、そんなこというなよ。別れ際にさよならなんて……悲しいこと言うなよ……」と言ったように彼女に対して思いやりのこころを持ち、成熟し、妄想分裂ポジションから抑うつポジションに移行し、現実の世界に目を向けるきっかけをつくりだした。

新劇場版 破では、序で当初確執があったが、和解した鈴原トウジや相田ケンスケと交流するようになり、アスカとも第8使徒との戦いを通じて深い情緒的

交流を重ね、アスカ自身がシンジに対して恋心を抱くようになる。そのほかにも色々な情緒的交流を重ね、なにか思春期らしい生活になりつつあるが、第9使徒に向き合うまで、父との対峙というエディプス葛藤そして思春期の強い喪失的情緒で葛藤にはまだ向き合えていないように感じられる。

アスカが第9使徒と化してしまい、そこからのシンジの心の動きについて考えて行きたい。

1) 松城で爆発事故が起きて、急遽、碇ゲンドウが司令塔として第一種戦闘配置を指示したシーン

シンジ「でも他のエヴァも、ミサトさんもいなくて、僕一人じゃどうしようもないですよ」

マコト「作戦系統に問題は無い。今は碇司令が直接指揮を取ってるよ」シンジ

シンジ「父さんが……？」

→いままでミサトの指令で動いていたのが実の父が指令役になること

「穏やかな超自我」から「強烈な超自我」に逆戻りしているように感じる。

2) 攻撃目標をシンジが目にして狼狽えるシーン

シンジ「はっ。まさか……使徒？これが使徒ですか？」

ゲンドウ「そうだ。目標だ」

シンジ「目標って、これは……エヴァじゃないか。……そんな」

シンジの正面に3号機が近づいて来る。激しい砲撃を浴びながら、ゆっくりと歩いている。

ゲンドウ「目標は接近中だ。おまえが倒せ」

シンジ「でも、目標って言ったって……アスカが乗ってるんじゃないの……アスカが……」

第9使徒がアスカだと感じたシンジは攻撃できず、使徒にやられっぱなしの状態になる。

ゲンドウ「シンジ。なぜ戦わない？」

シンジ「だって…アスカが乗ってるんだよ…父さん……」

シンジは使徒の攻撃を受け、苦しみながらも反撃しようとししない。

ゲンドウ「構わん。そいつは使徒だ。我々の敵だ」

シンジ「でも…できないよ…人殺しなんてできないよー！」

ゲンドウ「お前が死ぬぞ！」

シンジ「いいよ！アスカを殺すよりはいい！」

【考察】

アスカの載っていたエヴァ 3 号機が第 9 使徒となってシンジの前に現れたということは、アスカがこれまでの存在ではないことであり、その喪失であると考えられる。そしてそれはシンジ自身の投影であり、自身がこれまでの庇護を受けてのびのび育っていた時代（潜伏期）は喪失してしまったという象徴のようにも感じられる。この出来事をシンジの内的世界として考えるならば、シンジはその喪失が受け入れられないから悪い対象（使徒）がやってきたと捉える。妄想分裂ポジションへの退行が起きている。

しかしシンジはアスカの喪失、尚且つ彼女が悪い対象（使徒）に変わってしまったということすら受け入れられず、まだアスカが依然喪失していないと感じている。そしてシンジは「お前が死ぬぞ！」というゲンドウの助言を拒絶し、自らの死を選ぼうとする、それはシンジ自身が、青年期に至る過程（Adolescence

Process) に伴う心の痛みを受け入れず、成熟への拒否をしているように感じられる。

成熟には自身の攻撃性 (aggression) を認識し、抱く必要もあるのかもしれない。(この時、司令がミサトで、他のエヴァがいたら状況は変わっていただろうか?)

3) 第9使徒を倒そうとしないシンジに業を煮やしたゲンドウは毅然とした態度で、初号機の制御をダミーシステムに変える。

ダミーシステムに変えると、初号機は第9使徒の首を締め上げ、使徒はぐったりしてしまい、形成逆転する。そして倒れた使徒に初号機は肉を食いちぎるように喰らい、使徒の体内液や内臓が飛び散る。あまりの惨状に司令室のスタッフは皆凍りつき、マヤは目を覆う

シンジ「何だよ父さん……何だよ……！何やってんだよ！」

シンジ「くそっ、止まれっ！！止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ……」

シンジが何をやっても勝手に動く初号機。初号機が3号機のエントリープラグを口に咥えると、それを噛み砕こうとする。その異様な音に気付いたシンジは、嫌な予感を感じて動きを止める。

シンジ「……何の音だ！？……やめろっ……！」

初号機はエントリープラグを噛み砕く

シンジ「やめろー！！！」

→自ら喪失に決着をつけるのではなく、ダミーシステムに切り替えられ、シンジの主体性をはぎとられ、自らは動かすことができないで、使徒を倒してしまったこと、それは妄想分裂ポジションへの退行の強化となり、周囲に対して強い迫害感を感じたと考える。

→それ故に NERV 本部を破壊しようをしたと考える。

4) 怒りにまかせてシンジが NERV 本部を破壊する

マヤ「シンジくん！話を聞いて！碇司令の判断がなければ、あなたがやられていたかもしれないのよ！」

シンジ「そんなの関係ないよ！」

マコト「だが、それが事実だ」

シンジ「そんなの関係ないって言ってるでしょう！父さんは……あいつはアスカを殺そうとしたんだ。この僕の手で……！なんで！なんで！なんでなんだよ！」

シンジ「父さんは何も分かってないんだ！信じた僕が馬鹿だったんだ！父さんも、大切な人を失えばいいんだ！そしたら分かるよ！」

その間ずっと父・ゲンドウはその状況を見つめている。

ゲンドウ「LCL 圧縮濃度を限界まで上げろ。子供の駄々に付き合ってる暇はない」

シンジ「まだ直轄回路が残っ……うっ！……ちくしょう……ちくしょう……ちくしょう……」

そして意識を失うシンジ

→妄想分裂ポジションが強固になって迫害感が非常に高まっているとき、周囲に対して強い攻撃性を発露し、NERV 本部を攻撃する。周囲は非常に困惑しな

がら、説得するが、彼の喪失の怒りや苦しみを対峙し、きちんと受け止めてくれる対象が存在していないように感じられる。シンジも自分の喪失の感情を受け入れられず、破壊衝動で訴える（ある種 Anti-thinking process の④）ため、誰もそして父のゲンドウですら受け止めることはできず、事態はエスカレートしてしまい、ゲンドウは強硬手段しかとることが出来ず、二人の間は決裂してしまう。

5) シンジの夢の世界

シンジは夢の世界で電車に乗っている。そこで綾波や幼き頃のシンジと対話している。それはシンジの内的世界とも感じられる。

綾波はシンジの前に席に座っている。シンジはイヤホンをしている。

綾波「碇くん、いつもそれ、聞いているのね」

シンジ「うん、これ昔父さんが使っていたものなんだ」

幼い頃のシンジ「綾波の眼鏡と同じだよ」

シンジ「けどもういらなくなって置いていったものなんだ」

幼い頃のシンジ「僕と同じだよ」

シンジ「先生のところにおいてあったのを、僕がもらったんだ。耳を塞ぐと心も塞がるんだ。嫌な世界と触れ合わなくてすむからね」

綾波「嫌な世界？」

シンジ「そうさ。嫌いな父さんがいる世界。怖い使徒やエヴァがいる世界。辛いことをやらされる世界。ダミーがあれば父さんも僕がいない世界。僕も友達も傷つく世界……。でもいいこともあったんだ、けど結局は壊れてしまう……。嫌な世界さ。もう捨てるんだ。これしていると父さんが僕を嫌な世界から守ってくれと思ってたんだ。僕の勝手な思い込みさ」

シンジの持っていた音楽プレイヤーが頭上の網棚の上に置かれる。

綾波「碇くんは分かったの？お父さんを」

シンジ「分かったとした」

綾波「何もしなかったんじゃないの？」

シンジ「分かったとしたんだよ！！悪いのは父さんだ。僕を見捨てた父さんじゃないか！！」

シンジは頭を抱えて叫ぶ。いつの間にか、レイの座っていた場所には幼いシン

ジが座っている。

幼い頃のシンジ「そうやって嫌なことからまた逃げ出してるんだ」

シンジ「いいじゃないか！嫌なことから逃げ出して、何が悪いんだよっ！！！」

「はっ……！！」

夢から醒めるシンジ。覚めた時に病院のベッドの上にあった。

【考察】

シンジがいつもつけている音楽プレイヤーは、彼にとって父の面影であり、移行対象であると考えられる。そして綾波にとってのそれが幼いシンジの言う『綾波の眼鏡』である。そのプレイヤーをいつも聴いているということは、ライナスが毛布を肌身離さず持っているように、父の面影（母性的側面）を携えていないと現実に向き合えず、現実とシンジの内的世界の間の移行空間のなかで彷徨っているように感じられる。それはシンジが今置かれている現状が『嫌な世界』と感じられ、受け入れられないこと意味する。

綾波は「碇くんは分かろうとしたの？お父さんを」と言ったが、それはきちんと

とシンジが父と対峙し、ぶつかり、情緒的交流をしたのか？という問いのように感じられる。それに反論するシンジ。確かにシンジは怒りをぶつけた。しかし、それは NERV 本部への破壊衝動となり、誰も受け止めてもらえず、父に強引に抑え込まれ、より孤立を深めることになったと考えられる。

綾波との関わりのなかで自己愛的膜を破り、他者に対して思いやりの心を守り心が成熟したシンジであったが、父との対峙というエディプス葛藤がうまくできなかったために、再び、妄想分裂ポジションになり、内的世界（自己愛的膜）に籠ってしまう。その決意を夢のなかでしているように感じられる。

6) 父との対峙

覚醒するとシンジは、隔離室に拘束され、その後、父がいる司令室に連れてこられる。

ゲンドウは司令席に座ったまま、顔の前で手を組んでシンジを見据えており、ゲンドウとシンジの距離は非常に離れている。

ゲンドウ「命令違反、エヴァの私的占有、稚拙な恫喝。これらはすべて犯罪行為だ。なにか言いたいことはあるか」

シンジ「はい。僕はもうエヴァには乗りたくありません」

ゲンドウ「そうか、ならば出て行け」

シンジは無言のまま出ていく。

ゲンドウ「また逃げ出すのか？ 自分の願望はあらゆる犠牲を払い、自分の力で実現させるものだ。他人から与えられるものではない。シンジ、大人になれ」

シンジ「僕には、何が大人か分かりません」

【考察】

司令室でのシンジと父ゲンドウの距離が非常に離れているように、二人の心の距離も離れている。実際ゲンドウの言葉を非常に正論であるが、どれだけ真っ当なことを言っても、冷たく言い放っているようで、シンジの心には響いてこない。今のシンジにとって大切なことは彼の心をきちんと受け止めてくれる対象

であり、ゲンドウ自身の不器用できちんと関われない苦しさがあるようにも感じられる。それ故にシンジはどんどん心の退避が起きているように感じられる。

7) 喪失しかし躁的防衛に伴う心の現実の否認 世界の創生と破壊

NERV を出たシンジはシェルターで、ひとり座ってたたずんでいた。そこに爆発で吹き飛ばされてきた 2 号機が飛び込んてくる。そして 2 号機の掌に乗り、外の世界を見ると第 10 使徒が零号機を食いちぎり、パイロットごと飲み込み、使徒はエヴァと一体化し、女性のような体つきになっていた。

その光景を見たシンジはエヴァに向かい、父と対峙する。

シンジ「僕は、エヴァンゲリオン初号機パイロット、碇シンジです！！」

そう言い、初号機に乗り、第 10 使徒と戦うシンジ。

しかしエヴァ初号機が第 10 使徒のコアに攻撃を仕掛けている時に活動限界を迎え、使徒の反撃を受ける。

シンジ「綾波を……返せ」

そう言いエヴァは暴走し、使徒に激しい攻撃を加える。

シンジ「僕がどうなったっていい。世界がどうなったっていい。だけど綾波は…

…せめて綾波だけは、絶対助ける！」

【考察】

父に対峙し、エディプス葛藤に向き合っているように見えるが、シンジの攻撃性

(aggression) しか見えず、シンジは NERV への攻撃性が父に抑え込まれ、自己

愛的膜にこもり、零号機が飲み込まれたことで再び第 10 使徒（対象）に攻撃性

が向かったように感じられる。綾波をどうしても取り戻したいとするシンジは

綾波への愛の強さから突き動かされている。しかしそれは綾波の喪失を受け入

るのではなく、万能的に蘇らせようとするようにも感じられる。

それが以下のやりとりで示されている。

シンジ「綾波、どこだ！」

綾波「ダメなの。もう、私は、ここでしか生きられないの……」

シンジ「綾波！」

綾波「いいの、碇君。私が消えても代わりはいるもの」

シンジ「違う！綾波は綾波しかいない！だから今、助ける！！」

その後シンジは綾波を救い出し、シンジと光に包まれながら、綾波と抱き合い天に昇っていく。

シンジ「綾波、父さんのこと、ありがとう……」

綾波「ごめんなさい。何も出来なかった……」

シンジ「いいんだ、もう。これでいいんだ……」

【考察】

シンジの綾波の一途な愛を示す非常に感動的なシーンだが、これは悪い対象によって奪われた良い対象を取り返すという万能空想であり、それが視聴者の心をうつものになっている。

それはなにか物語（とりわけロボットアニメ）の最終話でよく提示されるシー

ンのようにも感じられる

しかしシンジの心の観点から考えたときに、シンジ自身が抱く、思春期の喪失を受け止めきれないでいるように感じられる。綾波との関わりの中で一度は現実を受け入れ始めたが、耐え難い喪失の感情にシンジの心が受け止めきれず、妄想分裂ポジションの世界に陥り、対象の喪失を完全に否認し、万能的な充足や歓喜の幻想にひたる躁的な心になっているように感じられる（躁的防衛）。（その世界が人類補完計画のように感じられる。）

躁的な世界では新しく理想化された輝く対象が熱望される。その対象に向けたさまざまな欲望や刺激的な考えが休みなく心に衝迫し、その対象との一体感体験へと絶えず駆り立てられる。一方でその妨げとなるあらゆるものには、容赦のない攻撃や破壊、非難が向けられる。そういうことがリツコの言葉に集約されているようにかんじられる。

リツコ「人の域に留めておいたエヴァが本来の姿を取り戻していく。人のかけた呪縛を解いて、人を超えた神に近い存在へと変わっていく。天と地と万物を紡ぎ、相補性の巨大なうねりの中で、自らをエネルギーの凝縮体に変身させている

んだわ。純粹に人の願いを叶える、ただそれだけのために！」

リッコ「この世界の理（ことわり）を超えた新たな生命の誕生。代償として、古
の生命は滅びる……」

躁的世界は幻想であり、維持できるものではない。排出された悲哀がふたたび
心に回帰して抑うつの苦しみとして体験される。

新劇場版 破 ではシンジと綾波が一体となる幻想的なシーンで終わるが、今
後、新劇場版 Q では、その後、現実に戻されたシンジとそして周りの人々
の苦悩と再生が描かれていくと考えられる。